

第5回文化・教育委員会議事録

1. 開催日時：平成29年7月3日(月)10時30分～12時30分

2. 開催場所：虎ノ門ヒルズ森タワー9階 会議室TOKYO

3. 出席者：

<文化・教育委員>(五十音順)

青柳正規委員長、秋元雄史委員、池坊専好委員、今中博之委員、桂文枝委員、
絹谷幸二委員、コシノジュンコ委員、真田久委員、篠田信子委員、杉野学委員、銭谷眞美委員、
セーラ・マリ・カミングス委員、松下功委員、山崎貴委員、吉本光宏委員

<臨時委員>

多田健一郎内閣官房東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会推進本部事務局企画・推進統括官、
永山裕二文化庁長官官房審議官、勝又正秀スポーツ庁オリンピック・パラリンピック課長、
岡部大介外務省大臣官房文化交流・海外広報課長
桃原慎一郎東京都生活文化局次長、堤 雅史東京都教育庁次長

<組織委員会>

森組織委員会会長、武藤事務総長、布村副事務総長、中村企画財務局長、藤澤広報局長、
小野スポークスパーソン、中安アクション&レガシー部長(文化・教育担当)

4. 次第

- 【議題】1. 東京2020フェスティバル(仮称)の方向性
2. 東京2020参画プログラムの活性化及びアクション&レガシープラン2017

5. 配布資料

資料1：文化・教育委員会名簿
資料2：東京2020フェスティバル(仮称)の方向性
資料3-1：アクション&レガシープラン2017及び東京2020参画プログラム
資料3-2：東京2020教育プログラム(愛称：「ようい、ドン！」戦略策定に向けた検討
資料3-3：東京2020参画プログラムの活性化

参考資料1：文化・教育委員ヒアリング概要
参考資料2：アクション&レガシープラン2017(案)※文化・教育関連(抄)
※参考資料は机上配布のみ

○武藤事務総長

皆さん、本日は御多用中のところお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ただいまから、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会第5回文化・教育委員会を開催いたします。私、冒頭の進行を務めさせていただきます、組織委員会事務総長の武藤でございます。よろしくお願いいたします。

では、まず初めに、本日の委員会のメディアへの公開についてお知らせいたします。前回と同様になりますが、記者の方にはフルオープンとさせていただきます。なお、ムービー・スチールの方は、会議の冒頭のみオープンとさせていただきます。

まず、開会に当たりまして、森会長から一言、御挨拶をお願い申し上げます。

○森会長

おはようございます。月曜日、またお暑い中、お集まりをいただきまして、御礼を申し上げます。

冒頭に、私どもの仲間といえますか、委員として御活躍いただいております、市川海老蔵さんの奥様が御他界になりました。御承知のとおりです。奥様が病院からお帰りになるその日も、この問題に対してずっと、御自宅から早く帰るようにという連絡があったそうですが、帰らないでそのままこの仕事を中村局長と進めておられたほど御熱心に取り組んでおられまして。本当に感謝でいっぱいです。

皆様と御一緒に黙祷をささげたいと思いますので、御協力をいただければと思います。

そのままで結構でございます。

黙祷。

(黙祷)

ありがとうございました。

後ほど、中村局長からまた御報告が詳しくあると思いますが、まず、今日は通常の委員会の開会をこれからさせていただきます。

昨日は、東京都議選がございました。それぞれ皆さん、いろいろな思いもおありでしょう。私ども多少、政界に関与していた者にとりましては、予想はしていたものの、これだけ大変な結果が出てくるということは、ちょっと及びもつかなかったわけでありまして。要は、どういう構成であれ、議会は議会、都庁は都庁、組織委員会は組織委員会だと思えます。従来どおり、粛々とまたこのオリンピック、関連する事業または整備等々は進めていかなければならないと思っております。

ただ、御承知のとおり、この組織委員会が設立されてましてから3年目になります。ちょうど真ん中辺りになりましたが、当初から、知事さんが4回かわるといって、そういう世相の中に、ややもすると巻き込まれつつある。議会もまたこういう形になったということをお我々は受け止めて、なお一層、厳粛にこの問題はきちんと進めていかなければならないと思っております。

東京都、そして東京都議会、協力をしながら、ぜひ、オリンピック事業そのもの、特に東京都さんをお願いをしたいのは、いわゆるアクセスの環境の整備、この問題は最大の焦点になっておりますので、これをぜひ、しっかりと、この委員会とは直接ではございませんけれども、オリンピック及びオリンピック関連事業に及ぼす大事な問題でありますので、お願いをしなければならぬと思っております。

さて、先週からこの東京2020大会もロンドン大会に倣って大会の気運情勢のために大会の直前期に文化フェスティバルを開催すべきではないか、という検討をお願いいたしました。

先週行われましたIOCとのセッションの中でも、東京2020大会において、日本文化を元気づける契機としてもらいたいというお話がございました。組織委員会も、大きな予算を組めるわけではございませんが、オリンピック・パラリンピックの盛り上げにつながる文化フェスティバルの実施のためには、組織委員会自身、予算も含め、前向きに検討を進めなければならぬと思っております。

また、国や東京都においても幾つかのプログラムが検討されている必要があると、このように考えておりますし、これにも協力していかなければならぬと思っております。

文化・教育委員会の皆様の企画・アイデアについては、この文化フェスティバルの中で積極的に取り入れてまいりたいと思っております。ぜひとも皆様方にこれからも引き続き、積極的に御協力を賜りたいということをお願い申し上げます。

さて、いよいよまた夏に入っておりますが、この日本の最も風土、文化の中に豊かなものは、日本国中どこかで夏祭りをやっているということです。この夏祭りも今年を外しますと、オリンピックまでに2回しかないということになりますので、今年の夏も、少し、この夏祭りを通じて気運の情勢を図る、それぞれ計画を進めております。その一環として、うちわと法被、HAPPY & PEACE。今日から発売されます。全国展開を商工会あるいは、全農、農協あるいは漁連、それから青年会議所等いろいろな団体を通じて、これを全国に販売をしていく。今日はその最初のものでございますので、無料でございますから。どうぞお持ち帰りいただければと思います。

なお、これにちなんだ浴衣の製造も進めているようでございますので、今年の夏から、全国各地でこのオリンピックマークがついた、パラリンピックマークがついた盆踊りが華やかにやられるんじゃないかと期待をいたしております。

浴衣でありますので、コシノジュンコさんにサポートいただくほどのものではございません。こちらの事務局のほうで考えたものでございます。

どうぞ、今日もまたよろしく御議論をお願いをしたいと思います。ありがとうございました。

○武藤事務総長

森会長ありがとうございました。

引き続きまして、本委員会の委員長であります、東京大学名誉教授、青柳正規先生から一言、御挨拶をお願いいたします。

○青柳委員長

今日は次第どおりでございますけれども、東京2020フェスティバルについて、また東京2020参画プログラムの活性化について、いろいろな御意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず、フェスティバル。これは、2020年の4月からの予定でございますけれども、このフェスティバルについては、この間、多くの委員の皆様方にヒアリングをさせていただきました。そのコンセプトや、あるいは実施すべきプログラムのアイデア等をいただきまして、誠にありがとうございました。

さらに、委員会のもとに設置しましたワーキンググループでも、政府や東京都、あるいは関係自治体からステークホルダーとしての御意見をいただきました。今日はこれらを踏まえて、事務局がまとめたものを受け、それに基づいて御意見を頂戴したいと思います。

それから二つ目は、文化オリンピックや教育プログラムをはじめとした、参画プログラムについてであります。この間、全国のさまざまな団体がこのプログラムに参画いただくとともに、組織委員会においてもマスコットの選定過程で全国の小学生を巻き込むなど、人々が大会に関わることができる取り組み、「よい、ドン！」などもそうですが、これは会長のお考えだそうですが、取り組みを工夫しながら進めています。

そして、本日は、この参画プログラムを活性化させ、さらに多くの方がオリンピック・パラリンピックに参画できるアイデアについて御意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

いよいよ大会の3年前になろうとしております。そのため、これまでさまざまな議論を重ねてきましたけれども、今後は、より具体的な形にしていくための、物事を決めていく段階になっておりますので、本日はぜひぜひ御関連に、あるいは忌憚のない御意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。どうかよろしく御挨拶申し上げます。

○武藤事務総長

青柳委員長、ありがとうございました。それでは、ここから先の議事の進行は、青柳委員長にお願いいたします。

○青柳委員長

それでは、まず議事に入る前に、今回、新任の委員から御挨拶をいただきたいと思います。

まず、東京藝術大学美術館館長の秋元雄史委員でございます。秋元委員、よろしく御挨拶申し上げます。

○秋元委員

おはようございます。新しく委員として加わらせていただきます。秋元といいます。

藝大に来る前は、瀬戸内の直島、またその後、金沢で、美術館とまちづくりといったような視点で仕事をまいりました。どうぞよろしく御挨拶申し上げます。

○青柳委員長

どうぞよろしく御挨拶申し上げます。それから、秋元先生の次は、株式会社ニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏委員にお願いいたします。

○吉本委員

おはようございます。吉本です。

日本生命の研究所に在りまして、文化政策の研究、あるいは文化事業のコンサルティングなどをやらせていただいております。ここ数年はオリンピックの文化プログラムということで精力的に研究しており、ロンドン大会、リオ大会とも文化プログラムの調査をしておりますので、その情報で何かしらお役に立てればと思いますので、どうぞよろしく御挨拶申し上げます。

○青柳委員長

ありがとうございます。

吉本さんは、ロンドンオリンピックの文化プログラムはブリティッシュ・カウンシルの湯浅さんとともに、一番よく存じ上げている方なので、よろしく御挨拶申し上げます。

それでは、新委員はこのほかにも2名おりますけれども、本日はあいにく御欠席のために、紹介のみとさせていただきます。

まず、大橋委員が御退任にされたことを受けて、新たに就任いただきました全国連合小学校長会会長の種村明頼委員でございます。それからもう一方が、榎本委員が御退任されたことを受けて新たに御就任いただきました、全日本中学校長会会長の直田益明委員でございます。

そのほかの委員の方々につきましては、これまでの文化・教育委員会において、もう既に御面識が相互にあると思いますので、配付している資料1をもってかえさせていただきます。

それでは、ここでスチール・ムービーのプレス関係が退席いたしますので、しばらくお待ちください。

(プレス 退室)

○青柳委員長

それでは、議題に移らせていただきます。

今回の委員会では、全ての議題について、まずは組織委員会事務局のほうから一括して御説明申し上げ、その後、委員の先生方の御意見をいただきたいと思っております。

議題の1の東京2020フェスティバル(仮称)の方向性について、議題2、参画プログラムの活性化及びアクション&レガシープラン2017について、事務局のほうから御説明をお願いしたいと思います。

○中村CFO

それではまず、東京2020フェスティバルについて、御説明申し上げます。資料2を御覧いただけますでしょうか。

おめくりいただきまして、まず、我々が検討した背景を簡単に御説明申し上げますと、2012年のロンドン大会でもその大会の直前にロンドンフェスティバルというものが開催されまして、大会成功に大きく貢献したというようにいわれております。イギリス・ロンドンをアピールする非常に質の高い文化芸術イベントを幾つも実施をいたして、国内外にこれから、イギリス・ロンドンでオリンピック・パラリンピックが始まるぞといった期待感を高めて、また、そういうポジティブな情報を発信できたということでございます。

したがって、東京大会におきましても、東京大会の直前からフェスティバルを実施することとして、その方向性について、そろそろ3年前を迎えるこの時期に検討を開始したいということが、前回の議論でございました。

その後でございますけれども、2ページ目にありますとおり、文化・教育委員会委員のヒアリングを実施させていただきました。いつもは非常に大人数の会ということでございますので、5月末から6月にかけて、5回に分けて、1回五、六名の委員の方々に日程を調整いただき、お越しいただきまして、お一人お一人の委員の方の御意見をじっくりと聞く機会を持たせていただきました。ありがとうございました。

また、あわせて、ワーキンググループということで、青柳委員長のもと内閣官房や東京都、外務省、文化庁、そのほか国際交流基金、地方ということで福島県、静岡県、横浜市、新潟市、それぞれの関係機関で文化プロジェクトに関わっている方々にお集まりいただきまして、2020直前、どのように盛り上げていくかといった御議論をさせていただきました。

その主な抜粋が3ページ目でございます。詳しい御意見はもうちょっと詳細な資料ということで、お手元の参考1というところで配付させていただいておりますけれども、時間の関係もございまして、ポイントのみ、この3ページで紹介させていただきます。

まず、フェスティバル全般につきましては、やはり東京大会でもロンドンに倣いフェスティバルを行ったほうが良いと。組織委員会も主体的にプログラムを推進してはどうかといった御意見をいただきました。

また、当然、組織委員会だけでできることは限られておりますので、都や政府との連携は非常に重要であると。地方自治体や文化芸術団体などが積極的に参加できるような仕組みを構築する必要があるのではないか、といった御意見もございました。

加えて、先ほど会長の御挨拶からもございましたとおり、プログラムの企画・政策に当たっては、この文化・教育委員会委員のアイデアを積極的に取り入れてもらいたいという御意見をいただきました。

具体的にどういふプログラムかということも議論が及びまして、例えばでございますけれども、日本の誇る最先端のテクノロジーと日本の伝統文化を組み合わせたいイベントができないかとか、あるいは、東京でイベントが行われるわけでもございますけれども、聖火リレーの活用や各地で行われるお祭りや連携するなどして、全国で参画できるようにする必要があるのではないか、ということでございます。

また、こうした大きな取り組みを統一したコンセプトのもとで実施するには、やはりフェスティバル全体を見据えた、そして、連携の中心となるプロデューサーのような方を、これはロンドンでも配置しておりましたけれども、我々も配置する必要があるのではないかといった御意見をいただきました。

ワーキンググループや文化・教育委員会委員の方々のヒアリングを踏まえまして、一つのたたき台を4ページ以下、整理しております。名称は、東京2020フェスティバル、仮称でございます。会期は、聖火リレーが大体、春ごろからスタートするのではないかということでございますので、そのころからオリンピック・パラリンピックの開始、また、最後はパラリンピックの終了するころまでといったことを想定しております。

日本の文化をきちんと海外にPRして次世代に継承するというのと、大会の盛り上げということを主たる目的としております。

事業体系が5ページでございます。これは今後、プロデューサーのもとで改めて検討させていただきたいと思っておりますけれども、幾つか層があると考えております。一つは、組織委員会が主導するプログラムを幾つか、これは予算の確保もあわせてでございますけれども、やっていく必要があるのではないかと思っております。

また、政府や東京都、地方自治体などとの共催プログラムというものと一緒に取り組んでいきたいと思っております。さらに、参画プログラムの延長ということでございまして、さまざまな文化芸術団体などが応募という形で、この東京2020フェスティバルに参画していただけるということも考えられるかと思っております。こういう取り組みで、なるべく外国の方々が日本文化に触れていただけるような、質の高いイベントを全国で展開できればと考えております。

実施体制でございますけれども、それぞれ一つ一つの企画は、組織委員会もやりますし、東京都、政府、各地方自治体も行うことになるかと思っておりますが、その実施に当たっては東京2020プログラムとフェスティバルということでございまして、同じコンセプトのもとで互いに連携する必要があるのではないかと考えております。

そういった観点から、プロデューサーをまずは置くということ、それにあわせて、アドバイザーボードのようなもの考える必要があるのではないかと考えておりますし、また、文化・教育委員会委員の方々からも積極的に御意見

を賜りたいと考えております。

7ページ目でございます。これはこれからの話でございますけれども、例えばということで、行うイベントのイメージでございます。プログラムのテーマといたしましては、日本・東京を象徴する場で日本の固有の伝統文化とテクノロジーが融合するようなイベント。あるいは、復興ということで、東北3県や熊本での文化芸術を発信する場。あるいは日本で全国の祭りなどをタイアップいたしまして、文化芸術活動の中で障がい者や子どもたち、外国人などが参画できるようなイベントができないかどうか。あるいは、選手村、各競技会場といったところで、国内外のアーティストが活躍できるような場も検討していく必要があるのではないかと、といったことを考えております。

それぞれ、組織委員会、政府、東京都、地方自治体、文化芸術団体と役割分担をしまして、重なりがあまりないように、うまく連携をとっていききたいというのが8ページでございます。

9ページ目でございます。4月ごろからということでございますけれども、ずっとイベントを続けるというのも、なかなか現実的に難しいところもございますし、疲れてしまうということもございますので、やはり幾つか盛り上がりを考えていく必要があるのではないかと考えております。例えば、3月か4月のキックオフ、ゴールデンウィークでの盛り上がり、開会式1カ月前、あるいは、オリ／パラの移行期間。こういった盛り上がりの機会を都や国などと連携をいたしまして、特定のところにイベントが集中しないように、うまく盛り上がりとあわせて、ばらけるような調整も今後させていただきたいと考えております。

広報・PRでございます。できるだけ多くの質の高いプログラムに参画いただくために、東京都や政府などとも連携をして、フェスティバルだけでなくさまざまなイベントが東京都、あるいは全国で開催されると思っておりますので、フェスティバルもPRいたしますが、それ以外の全国で開かれるイベントも包括的にPRできるようなことを考えられないかということも検討をしたいと考えております。

また、マークの開発、ロンドンでもフェスティバルのマークがございましたので、我々もマークの開発を検討していきたいと考えていますし、SNSやプログラム冊子などをつくって積極的に展開を図っていききたいと考えております。

最後、11ページ目でございますが、今後、フェスティバルの基本的な方向性を定めまして、プロデューサーやアドバイザーボードの設置を踏まえて、コンセプトやプログラムの企画に向かって進めていききたいと考えております。

本日、お手元でございますが、桂委員、松下委員、コシノ委員からアイデアを頂戴しております。これは後ほど、ディスカッションのときに御説明をいただきたいと考えております。

本日、御欠席の市川海老蔵委員から、東京2020フェスティバルに関し、ビデオをいただいております。フェスティバルの参考になるのではないかとということでございました。

メッセージが届けられております。

「本日、歌舞伎座初日より出席できず、申し訳ございません。先月、渋谷のシアターコクーンにて自主公演ABKAIを無事に終わらせることができました。また、その際のプロモーション映像ができ上がりましたので、皆様にも御覧いただきたく、御用意させていただきました。このイベントは歌舞伎のみならず、日本舞踊や津軽三味線、和太鼓など、さまざまな日本芸能を融合いたして石川五右衛門という作品につかったということでございます。御覧いただければ」ということでございました。

3分ほどの映像でございますので、御覧いただければと思います。

(映像上映)

○中村CF0

以上でございます。

市川海老蔵委員におかれましては、この公演の際も2020大会の文化プログラムについてのPRをしていただいたところでございます。

2020フェスティバルにつきましては、後ほど御議論をいただく時間を御用意しております。この後は簡単に、参画プログラムについて一通り御説明をさせていただこうと考えております。資料の3-1と3-2を御覧いただけますでしょうか。

アクション&レガシープランと参画プログラムでございます。

おめくりいただきまして、1ページ目、2ページ目で2017年版ということでございますけれども、こちらのほうは、今、参画プログラムが進んでいるということでございますので、この冊子の中でこの1年間、昨年10月から開始しました参画プログラムの内容、重立ったイベントについて、事例集ということでこのプランの中に盛り込むということを考えております。

続きまして、2ページ目の参画プログラムの現状でございます。簡単に申し上げますと、昨年の10月スタートいたしまして、文化プログラムや教育プログラム合わせまして、全体で1万件、参画いただいております。参加人数、それぞれ、一件一件合計いたしますと280万人ということでございます。一応、10月にスタートさせていただいて、想定を上回る方に、あるいはイベントの数に参画をしていただいております。引き続き、2020に向けてこの盛り上げを全国で展開していきたいと考えております。

4ページ目以降でございます。これは文化・教育委員会と関係するもの、関係ないものもございまして、ざっと御説明させていただきます。参画プログラムの中でも、みんなのメダルということでございまして、携帯電話を拠出いただきまして、それで2020大会のメダルをつくらうというプロジェクトを参画プログラムの一環としてやらせていただいております。これなどは、参画プログラムの中でも、2020大会に何らかの形で参画するという象徴的なプロジェクトでございますので、今後とも続けてまいりたいと考えております。

またおめくりいただき、こちらは教育とも関連しますので後ほどまた御説明いたしますけれども、マスコットのデザインの応募要項が5月に発表になりまして、デザインが8月1日から募集されます。幾つか審査員の方々に案を選び込

んでいただきまして、四つぐらいに絞りまして、エンブレムのときには一般の方から御意見をいただくという場を設けさせていただきましたけれども、このマスコットは特に子どもたちが待ち望んでいるということでございますので、審査委員会で御議論いただいた結果、全国の小学校のクラスごとに投票を行いまして、その得票の多いものを決定しようということを考えております。これもまた、メダルと同じく参画プログラムの中でも2020の大会につながる事例ということで、これも今後1年間、進めていきたいと思っております。

そのほか、6ページ目が文化オリンピックということで、参画プログラムの中で特に文化に着目したものの256件ございます。その中には、東京都が行っております、子どもたちが伝統芸能を体験するようなイベントや、例えば、被災地での文化イベントなどが含まれるところでございます。

また、この参画プログラムの一環といたしまして、7ページ目以降の夏に向けた気運情勢もやっていきたいと思っております。2020まで、あと夏は3回しかありませんので、本日お配りいたしましたエンブレム入りの法被やうちわなどを全国展開していきたいと思っておりますし、7月24日の3年前に東京都だけではなくて、千葉県や埼玉県、福島県、静岡県などで3年前イベントが開かれますので、この法被やうちわを使っていただき、全国で盛り上げていきたいと思っております。参画プログラムも「3 Years to Go!」という特別プログラム・マークを用意しております。また、秋には1000日前イベント、来年には平昌大会などがございますので、縦の連携も図っていきたくて考えております。

8ページ目は、先ほど紹介いたしました法被やうちわでございます。7月3日、本日から一般のオンラインショップで販売を開始しております。

また、9ページ目でございますけれども、参画プログラムも3 Years to Go!ということで、この1カ月間は3年前を盛り上げようという特別のマークを用意しているところでございます。

また、応援プログラムにつきましても夏祭りということで、より使いやすいルールとしております。なかなかスポンサーとの関係で制約が多いというのも事実でございますが、例えば、屋台などで販売される飲食物については、スポンサーの枠を広げまして、制約とならないようにしようであるとか、ポスターもなるべく広い形で作れるような工夫をガイドライン上もしているところでございます。

資料3-2が教育プログラムのほうでございます。愛称「よーい、ドン!」ということでございます。

現状を御説明いたしますと、2ページ目でございます。東京だけではなくて、神奈川や千葉、埼玉といった会場がある都道府県を中心に広がりを見せております。また、今後も、先ほど申し上げました、マスコット選定プロセスであるとかポスターを全国の小学生に描いていただくといったような取り組みを通じまして、この教育プログラムの輪をどんどん広げていきたいと考えております。

具体的なやり方でございますけれども、3ページ目、4ページ目にありますとおり、まずは教材を共有化したいと考えております。国際パラリンピック委員会のIPCが、特に2020用に開発していただきました「I'mPOSSIBLE」(アイム・ポッシブル)。これはコンマを取りますと「impossible」(インポッシブル)という、「不可能」。コンマを入れることで「I'mPOSSIBLE」、不可能を可能に変えるという、そういう意味がある教材でございます。

○カミングス委員

アポストロフィ。

○中村CF0

アポロストロフィですね。失礼いたしました。アポロストロフィですね、コンマではありませんでした。

アポロストロフィをつけるということで、I'mPOSSIBLEという不可能を可能に変えるという教材でございます。

また、IOCのほうでもオリンピックの理念を解説した教材をつくっていただいております。これらは本年7月上旬を目途にウェブサイトアップいたしまして、全国どこでもダウンロードして教材に使えるような環境整備を進めていきたいと思っております。

また、東京都のほうではいち早く、昨年4月からオリパラ読本をつくっていただいております。これも全国の自治体が活用できるよう、今ウェブサイト掲載に向けた準備を進めているところでございます。

教育の関係では、5ページ、6ページにありますとおり、オリパラのフラッグツアーを東京都から被災地、そして全都道府県に行おうとしているところでございます。その際は、オリンピックやパラリンピアンに小・中学校に訪問していただきまして、教育イベントをあわせて実施をさせていただいております。

また、マスコット投票でございますが、先ほど申し上げましたとおり、全国の小学生が一つのことを決めるということ自体、非常に大きな取り組みだと思っております。単に好き嫌いということではなくて、かわいい、かわいくないということではなくて、オリンピック・パラリンピックの理念を学校の場で先生のほうから一言解説してもらい、いろんなディズカッションをしていただいた上で決めるということは、非常に大きな教育上の効果もあるのではないかと考えております。先ほど御紹介しました教材なども改めまして、各学校に提供をしたいというように考えております。

また、6月24日、7ページ目でございますけれども、大学連携の一つのイベントといたして、「Tokyo2020学園祭」というものを明治学院大学で開催をさせていただきました。20近くの大学に参画していただきまして、さまざまな文化パフォーマンスを披露していただきまして、東海大学が一等賞をとったということでございました。また、大学連携も引き続き進めてまいりたいと考えております。

教育プログラムの御紹介が以上でございます。

最後に、参画プログラムをどう活性化するというところでございまして、資料3-3でございます。これはまた、今日ぜひ、2020とあわせていろいろなアイデアをいただきたいと思っております。参画プログラム、先ほど申し上げましたとおり、この1年弱の間に1万件ということで、かなり多く御登録いただきましたが、いま一度、大会と直接結びつくような企画

がないかということで、委員の方々からもいろいろアイデアをいただきたいと思っております。

例えば文化・教育関係では、携帯電話を使ってメダルをつくらうということで、金属はメダル用に抽出しますけれども、それ以外の部品を使ってアート作品をつくって、例えば選手村に展示するであるとか、あるいは小・中学校のポスター募集。これは、毎年行っておりますけれども、昨年度3月も金・銀・銅というものをつけさせていただきましたが、そういったものを今後も続けまして、選手村で展示するとか、あるいは大会の開催の会場で地元の小学校のポスターを掲出するとかいったアイデアがあるのではないかと思っております。

また、大学連携の関係では、オリンピック・パラリンピックをテーマにした、あるいは地元のPRを簡単なビデオにまとめていただきまして、例えばそれを地元の大会の競技と競技の間に流すであるといった取り組みも考えられます。

オリンピック音頭や音楽なども現在、三波春夫の音頭をどうアレンジできるかどうかといったところも検討しているところがございます。そういったものをあわせて、全国で踊りをやっていただいて、その踊りのパフォーマンスを競って、ダンス甲子園じゃありませんけれども、そういったことができないかどうかといったもの。

あるいは、藍色や市松模様をフラッシュモブという、全国いろんなところで急に踊りをするような取り組みでございますけれども、そういったものができないか。あるいは、それが大会期間中にできないかといったようなアイデアがございます。先ほど申し上げましたように、文化・教育の場でも参画プログラムということで、2020の大会に直接参画できるようなアイデアがございましたら、またいただきたいと思っております。

例えば、全国の公園であるとか、壁であるとかといったところにアート、落書きとか、アニメとかそういったアート。あるいは、芸術作品を置くといったことを進めていただいて、それが2020年以降も全国のいろんな公園には必ず一つそのオブジェがあるかというようなことが続きますと、それは2020以降のレガシーにもつながるのではないかと考えております。

こちらにつきましては、アイデア、事務局だけでは限りがございますので、ぜひ、委員からのアイデアもいただき、一つでも多く実施をしていければと考えております。私からの説明は以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。

それでは、これから自由に御議論いただきたいと思いますが、まず、今、中村CF0のほうからも御案内ございましたように、お手元に桂委員、それからコシノジュンコ委員、そして松下委員の資料がありますので、その順に簡単に御説明をいただいて、その後、自由に御議論いただきたいと思っております。

それでは、まず、桂委員のほうから、よろしく願いいたします。

○桂委員

皆さん、おはようございます。桂文枝でございます。

こういう各いろんな分野の皆さんのお集まりの中で、なかなか文化・芸能に関わる者が発言しても、なかなか実施する機会もなかったのも、もっと小さな委員会ということでコシノ先生も、絹谷先生も、この間、それが文化・教育ヒアリングということだったと思うんです。そのときに海老蔵さんが来られて、前、海老蔵さんが来られたときに一言も発言する機会がなかったので、せっかく来られているのだからご発言を、ということで、そのときは非常によくおしゃべりになって、熱く語っておられました。そのとき奥さんのもとにいたかったと思うんですけども。今日は、ですから、私これ終わってから歌舞伎座へ見に行こうかなと思っておるんですけども。

とにかく伝統芸能の中には、400年の歴史を誇る落語も入っているんですけども、前のいろんな資料の中に落語がなかったんですね。落語がありませんけども申しましたら事務局のほうから、落語は考えておりませんというふうな意見もありましたので、これではいけないと。

ただ、我々は、先ほどの歌舞伎のあの派手なパフォーマンスと比べますと非常に地味でございますので、また、言葉の壁があります。これに書きましたように、今や英語で落語をする、中国語で落語をするという落語家もおりますし、また、外国人の落語家も増えております。現に、私の弟子でカナダ人の落語家がおりまして、これは、桂、三に輝くと書いて、桂サンシャインというんですけども、これが結構イギリスとかアメリカ本土、いろんなところで私の創作落語をやってくださっております。ですけども、やはり言葉の壁があったりとか、また、大きいところではなかなか落語という、しゃべりだけの芸でございますので、たった一人で座布団の上でやるわけですから。そういうことで、どういう形でこのオリンピックを盛り上げられるのかなと思つてつくったのがお渡しした資料でございます。

ということで、ざっと簡単に書きましたけれども、もっともっと詳しく、その権利をどこへ帰属するのかとか、そして、その賞金はどれぐらいでという。私ども上方落語協会でも将来にやはり残る古典落語をつくっていかないと伝統芸能は続かないので。圓朝という人が明治のころに出てきて、すばらしい「芝浜」という古典落語が残ったわけですが、やはり、初めは全部、創作落語、新作落語から始まるわけですね。

このオリンピックというテーマを選手側からでも、選手を持つ親とか観客とか、いろんな立場から、いろんな話がつくれると思うんです。それを東西の落語家がやると。それは、その先もずっと、いい作品なら残っていくので、これは立派なレガシーになるんじゃないかなと思っております。そういうことで、これを提案させていただきました。

僕、もっとページをたくさん書いて映像もつけたんですけども、マネジャーが、1枚のほうを皆さんに見てもらいたいんじゃないかなということで、決して始末したわけじゃありませんので、よろしくどうぞお願いいたします。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。大変、参考になる御意見で、ありがとうございます。

それでは、次に、コシノジュンコさんの資料に基づいて説明をお願いいたします。

○コシノ委員

先日、海老蔵さんの五右衛門も見せていただいて、もう既に、お祭りは始まっているなというような兆しが見えて、このような言葉ではなくて、きちっと見せていただいたのがすごく快適でした。そういう意味で私も同じ意見なんです。今日は一応もっともっと深くやりたいんですけども、簡単にプリントしております。

随分前に、私、クール・ジャパンで「美味しい日本」「面白い日本」というのを提案させていただいたんですね。やっぱり、世界から見ておいしいという文字、美しい味と書いて「美味しい」。それも見た目がすばらしい、味は中身、だから両方だと思うんですね、対局で。だから、その表面的なものテクノロジー、技術的なもの、そういうものがやっぱり一つになったのが、日本のすてきなところだと思います。

「面白い日本」って、面が白いと書いて「面白い」んで、日本はどんどん、どんどん変化しておもしろいことを幾らでもやっていけると、漫画、アニメにしても。これは単純に出てきたことではなくて、伝統から確信だと思います。

そういう意味で皆さんの御意見もいろいろ、青柳先生も言っていた「和」というもの。やっぱりこの和食、「和」というものですね、和食というと食べることでですけども、和の色ということで、やっぱり色のある日本という、いろいろあります。いろんな伝統色もあれば、自然色もあれば、地域の色もあれば、いろんな色がおもしろく表現できるという、単純ですけども、これから考えればいいと思うんですね。そういう和食という、世界遺産にもなった和食だけではなくて、和の色をもっと強調するということ。

やはり祭りはもう、夏祭りはもうこれはかかせないものですから、お祭りには花火がつきものなんですね。ですから、立体的に祭りを、日本中でにぎわって、日本の伝統的なすばらしいものを世界にアピールする機会ですので、これをしっかりやっていくという、今まで過去にお話ししたことが多いかと思っておりますので、紙に書いて提案しました。

それで、もっと具体的にやりたいんですけども、それをどういうふうに出していいかちょっとよくわからなかったものから、改めてまた思うことを書かせていただきます。ありがとうございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。

それでは、次に、松下委員のほうからよろしくお願いします。

○松下委員

ありがとうございます。今日のお話を伺って随分いろんなところで活発に行われてきているんだと思って大変うれしく思います。特に、子どもたちの参画が増えてきたのはいいなと思っております。私も子どもたちと色々な歌つくったりしていきますので、いろんなところでオリンピック・パラリンピックの楽しみ方を子どもたちと共有できたらいいなと思っています。

ちょっと伺っていて幾つか気になったことがあります。1点は、すごくいろんな活動が行われているんですけど、国際的な活動はどうなのかな。海外の人はどうやって活動するのか。我々、日本でやるんですけども、これは今年は日本だけがやるんじゃないで、やっぱりアジアあるいは世界のというの。もう少しそういうイベントも増えてきたらいいんじゃないかなと思ったんですね。

というのは、実は、先週までしばらく、2週間ほどチリに行っておりまして、いろんな関係者に会いました。それは、オーケストラを引き連れて日本の伝統も持っていきまして、熱狂的に迎え入れてくれて。ただ、それは日本の伝統を持っていったんじゃないで、我々は日本の伝統と、やっぱり皆さんがわかる西洋的なものの融合を提示したんですね。こんなにまで熱狂的に迎えてくれるのかと思うほど大きな拍手でした。

その中で、何人か、実は、今、東京オリンピックを目指しているという若い人に会ったんです、卓球と水泳だったんですけど。ああ、こんなに注目しているんだと思ったんで、やっぱりこの文化・教育委員会のプログラムの中にも海外の人が参画できる。やっぱり日本だから参加できるんだというようなことを考えたらどうかというのは、今感じました。

それともう一つ、盛り上がる2020年の図の中に、ぜひこれだけ文化・教育委員会はこんなに多様な方がいらっしゃるんですから、何か皆さんが一緒になったフェスティバルが一つ、もちろん、いろんなフェスティバルの中で、我々が一遍にアイデアを出して一つ企画したら、おもしろいものができるんじゃないか。これだけ違う人がそろってないの。それこそ、オリンピックとパラリンピックの間は、この委員会が占めてやろうというわけじゃないんですけども、みんなできつくるようなね、意見を出すだけじゃなくて一緒につくったら、何かおもしろいものができるかなと思いました。

それで、私は、昨年はずっと夏と冬にイベントを行っております。これは、Summer Arts Japanって昨年行われまして、Sports Arts Scienceという試みを行っておりまして、今年は9月6日に行うんですけども。大学と企業と色々な民間と、いろんなものが一緒になって、障がいの方も一緒にやろうという研究をしています。スポーツと、昨年は床運動を音にするということをやったんですけども、今回、薄いんですけども、ここにバドミントンのシャトルがあるんですけども、今回はバドミントンに注目しまして、車椅子バドミントンの人と健常者のバドミントンの人たちの動きを舞台作品に仕上げようと思っておりまして。日本の代表的な作家の夢枕獏さんに、七夕の話で新しいストーリーを書いていただいたんですけども。七夕のけん牛と織り姫が恋をして手紙をやりとりして、天の川の掃除をしなくなったので乱れたという話がありまして、それを翁が来て、地を踏んで整えるという話から、最後に蹴鞠まで出してきてですね。それをどう現代と日本の最先端の科学と芸術作品にできるかという試みをやっております。このようなことをできるだけ多く続けていきたいなと思って。

さらに、七夕というのはもうアジア中そこら辺にある話ですけども、世界の話に持って行って、それが日本の中でどういうふう展開して行って新しい可能性が残っていくというストーリーを幾つかつくって、新たな芸術作品にしていきたいなと思っております。

私にとってとっても大事なものは、人との出会いですので、この委員会も素晴らしい方々と出会わせていただいたので、多くの方々が一緒に何かをつくれるという3年間にできたらよいかと思っております。

8月6日でございますので、御案内をお送りさせていただきますが、ぜひおいでいただければと思います。ありがとうございました。

○青柳委員長

どうもありがとうございました。

これまで海老蔵さんの石川五右衛門、南禅寺の南大門からの「絶景かな、絶景かな」ですね。それから落語、そして、花火などのコシノジュンコさんの提案、それから今、音楽、アート&サイエンスのプログラムとしての松下委員の御提案などがございました。

このほかにもいろいろあると思いますので、ぜひ、ぜひ、御意見あるいは御質問等、何でも結構でございますので御討議いただければと思います。

今配られたもので、これは絹谷先生のですね。じゃあ、これお願いいたします。

○絹谷委員

絹谷幸二でございます。絵描きでございます。

海老蔵さんのさっきの南禅寺門前の、いわゆるジャポニズムというものを日本のこのオリンピックを舞台にして、日本をわかってもらうという意味で、例えば、宙づりが出ていただくとか。あるいは、これは開会式ですが、新しい日本の技術としまして、3Dとか、いわゆる見えないスクリーンというのがあるらしいんですけども、それに映像を映して、そういう龍の中を海老蔵さんが宙づりで飛んでいただくとか、新しい日本の技術を海外に発信するというのと古いものを合体させるという意味で、こういう図面をつくらせていただきました。

これは、Zero-Tenという会社の人々がやっているんですけども、例えば、雲というのか炭酸ガスか何かわからないんですけども、何かそういうものにも映せるということでございますので。あるいは夏の宵にこういう、空から会場を超えたところにも映像が映せるというふうな形でございます。

そういう映像と実際、虚と実といいますが、そういうものを、あるいは新しい芸術と古典的なものとを合体させる。これは、不二法門という言葉がございます、相反する概念はそれぞれ別々ではなくて一つのものの部分であるというようなコンセプトを世界に提言すると。つまり、水と油は別々だ、共産主義と自由主義は別々だ、善と悪は別々だというようなその西洋的な考え方のほかに、そういうものは、私たちの体の中にも水と油というものが共存しています。同じところがございます。善と悪も、例えば、ミケランジェロの絵画は天国と地獄が同じ画面の中に描かれています。そういうことがあるんだよと。アジアにはそういう世界があるんだよということを提言していくというのも一つのこれから新しい、ちょっと弁証法にも似ているんですが、維摩経という大昔のインドの方の考え方なんです、そういうものを見せる。

そういう何か、日本が提言していく。今、コシノさんがおっしゃったように、和の色といいますが、そういうものの中に西洋では考えられないような双眼の思想があるということをいろんな場面で。このフェスティバルが、ただおもしろかったと。ただ、光がぴやぴやあつと飛んでいたというほかに、指し示して知らしめるという考え方が根底に流れていたらいいんじゃないかなと思いますね。

それから、フランスで行われましたジャポニズム展のような絵画、工芸、演劇、能、あるいは文枝さんの落語といったものを2020でやっていられるんですけども、その前段階から、あるいはオリンピックが終わった後もそういうものがビエンナーレかトリエンナーレで継承していけたらいいなというのが一つございます。

それからもう一つ、先ほど松下先生がおっしゃったように、海外との取り組みでございますけれども、私、審査員をしているんですが、「地球の宝物」という今年のコンセプトで、品質保証協会というのがユニセフという機関を使いまして、1万7,000点ほど外国の小学生、その世界の学校の子どもたちですね。そういう人から作品を募集しています。今年は「世界の宝物」という、そのコンセプトだったんですけども、例えば、美しい地球とか、何かテーマを決めて、世界の子どもたちにそれを描いていただいて、そして日本の子どもたちにもそれを描いていただく。つまり、そこでも何か意味合いといえますかね。これからの地球をどうしたらいいのかということ子どもたちにも考えてもらうために、そういう展覧会を順次やっていただく。それも継承していただく。まあ、4年ごとにオリンピック行われますから4年ごとでもいいと思うんですけども、そういう世界的な子どもを、この子どもたちはレガシーそのものなんですね。ですから、まだ生まれていない子どもたちにも将来やっていただくという長いレガシーで、オリンピックのときに生まれたそういう地球に対して、あるいはスポーツに対して、あるいはそういうことに対して考えてもらうというような展覧会、そういうものも計画していただきたいと思うんです。

そして、今年の「地球の宝物」という展覧会で海外で一等賞になったのは、絵はそんなに立派な絵じゃないんですけども、それを描いた子どもが口に筆を加えて絵を描いているんですね。そうすると、その絵も大切なんですけども、その子ども自身が地球の宝物ということもありますので、そういうことも検証していただくと、そういうオリンピックになっていけばいいんじゃないかな。

それからやはり、僕は前、運輸省の何かの委員していたんですけど、そのときに、日本に人が来てもらいたいということとやっていたんですけども、パンフレットが、それまでは日本だけだったんですけども、置いてあるのが。日本の交通公社とかJTBとかってそういうところだけだったんです。ところがそういう刷り物をアジアとかいろんなところに置いて、そして、向こうでシンポジウムをして、そして、その人たちを来てもらうということをするれば、また日本のこのオリンピックを中心に日本を見ていただけるという人口が増えてくると思うんで、できるだけその発信の方法を東京都だけにとどまらないで、先ほど松下先生がおっしゃったように、外にもそういうばらまきといいますが、そういう宣伝といいますが、そういうものもやっていただきたいなと思います。

○青柳委員長

ありがとうございます。今、大体、主な意見が出ましたが、一つは、やっぱり日本文化の発信というのが非常に重要だけど、それがひとりよがりにならないで、やっぱりある相対化、世界の中での日本文化という視点が非常に重要で。そのためには、海外からの著名なアーティストを呼ぶとか、あるいは、いろんなところで発信をするというようなこと、そういうようなことで本当のよさが出てくるんじゃないかという御意見だったと思います。

それでは、ここからは、自由にそれぞれ委員の先生方のお考えを述べていただきたいと思います。すみませんが、挙手していただけますでしょうか。

どうぞ、よろしく願います。今中さん。

○今中委員

今中です。2点ほどお伺いしたいことがあります。

まず、1点目、委員同士なんですけど、吉本委員に質問がありまして。ロンドンのほうの書面等を読ませていただいているんですけども、一番気になるのは、プロデューサーのところ非常にポイントになってくると思うんですけども、その中で僕は非常に注視するのは、オリンピックとパラリンピックをどうつなぐのかというのが一番気になっています。

そういう意味で、ロンドンで、そのプロデューサーという方、もしくはその組織がオリとパラをどうつないでいったかというのを少し聞かせていただきたいなというのが、まず1点目。

もう一つは、事務局サイドのほうに参画プログラムが、非常に関東方面ばかり、これ偏っているんですね、データ的に見ると。我が関西は本当にしょぼしょぼの状態なんです。その辺の関係で、どうしていったらいいかということに関しては、これ例えばですよ、都道府県ごとにフラグを立てて、委員長さんみたいな。それが芸能の方でもいいですし、音頭のとりやすい方に音頭をとってもらって、46人ぐらいを組織してもらってというのも非常に実践的ではあるんですけども、可能性はないのかなという。組織的にしんどいのか。その辺も組織委員会さん、どう思っているのかなと。2点質問と、疑問とあります。

○吉本委員

御質問をいただきましたので、私の知っている範囲でお答えしたいと思います。

ロンドンの文化オリンピックは、プロデューサーではなくてアーティストックディレクターということで、ルース・マッケンジーさんという方が就任をされました。この方は主にフェスティバルのディレクターだったんですけども、文化オリンピック全体のディレクターというお立場でした。そして、フェスティバルの中にはアンリミテッドという障がい者のアートの大規模なフェスティバルがあったんですけども、それも含まれておりまして、それらの含めた統括的なディレクターをされたと認識しております。

ただ、アンリミテッドはアンリミテッドでまたその全体を統括する方がいらっちゃって、でするので非常に複雑な構造になっていました。でも、オリンピックとパラリンピックをどうつないだかということに関して申し上げますと、文化オリンピックというのがオリンピックもパラリンピックも通して行われておりましたので、その両方のディレクターでルースさんという方が就任されていたということです。

あと、ついでにちょっと申し上げますと、そのルースさんには何度もお目にかかったことあるんですけども、就任をされたのが大会の2年前だったんですね。いろんな事情で2年前になったんですけども、もっと早く就任をしていればもっといい文化プログラムを実施できたというふうにおっしゃっていらして。でするので、東京大会への提案として彼女が再三おっしゃっているのは、とにかくディレクターを早く決めたほうがいいですよということと、その方にある程度の権限をお任せして全体的に統一したプログラムをつくられたほうがいいですよ、ということでした。

○中村CF0

ありがとうございます。地域的なばらつきは、それは我々も注視しているところでございます。大会3年前ということでございまして、まずは、やはり開催都市である東京都と、あとは、実際に会場がある都道府県、関東近県がどうしても中心になってしまいますけれども、そういったところとは5月の末に役割分担の面でも合意ができて、だんだんと盛り上がってきていると。そこが教育の認証校であるとか、イベント校につながっていくと。もう一つの固まりが復興ということでございます。

あとは、それ以外の地域にどう広げていくかというのは大きな課題だと思っております。一つは、先ほど申し上げたように、祭りというのは関東に限らずどこでもやっておりますので、いろんな全国の商工会を通じて、今、祭りと、先ほどお配りしたうちわとか法被とか、そういうものでなるべくちょっと機運を盛り上げたいということを考えております。あと、その上で、地域ごとの核になるものが何かということからは、また、考えていかなきゃいけないと思っておりますけれども、今やはり我々が想定してますのは、都道府県オリパラ本部というのはそれぞれほとんどの都道府県にございますので、まずはそういうところと連携をとっていくのかなと考えております。

今後、恐らく聖火リレーなども各都道府県と連絡とる場合には、そういうところがまずは窓口だろうと思っておりますので。ばらばらというよりも、そういうところを核に連携をとっていくことを今検討はしております。

○銭谷委員

私は、今、博物館のほうにおりますので、博物館関係者は今回のこの文化プログラム、あるいはこの東京2020フェスティバルに大変な関心を持って、ぜひ、自分たちの展覧会事業もこれに加わりたく、こういうふうにいるわ

けですけれども、ちょっと幾つか皆さんから聞かれていることがありまして、その辺がもうちょっとわかっただらいいなというのがあるんですけども。

一つは、ちょっと細かい話なんですけども、これは文化庁がおつくりになった「文化プログラム発信！」というパンフレットですが、この一番後ろに東京2020大会に向けた文化プログラムの枠組みというのがありまして、それで2020文化オリンピックとbeyond2020プログラムというのが書かれているわけですね。それで、例えば、先ほど松下さんからお示しのあったこの東京藝大のイベントですと、ポスターの右上にbeyond2020というのがもう印刷されていて、beyond2020は割と、言葉は悪いんですけど広まってきていると思うんですけどね。

それで、この文化オリンピックが、実施主体がbeyond2020に比べると企業が入らないという感じで少し狭いのかなという感じがするんですけども、このbeyond2020と東京2020応援文化オリンピックのこの事業プログラム参加というのとは両立できるんだと。物によってはですね。そういうところの広報が、いわゆる応援プログラムに入れるんだという広報が、もうちょっといるんじゃないかなと。

ぜひ、これは両方、力を合わせて私はやっていけばいいと思っていますので、その辺をこれからお考えいただいたらどうかというのが一つ私の、博物館関係者としては。割と今、博物館・展覧会このbeyond2020は結構、皆さん参加しているんですよ。ですから、その辺は思いました。それが1点。細かいことで申し訳ないんですけど。

それから、東京2020フェスティバルについてですけども、これはヒアリングのときも申し上げたんですが、ぜひ、聖火リレーと連動したプログラムというのを、全国47都道府県で考えていくべきじゃないかな。これは、主催なのか共催なのか募集なのか、そこはありますけど、私は共催がいいんじゃないかなと思うんですけども。やっぱり、聖火リレーというものとその聖火リレーを実施するその都道府県における文化のいろんな事業というの、これはうまく連動すると本当に盛り上がるんじゃないかなという感じがしましたので、聖火リレーとの関連性ということをぜひ、お考えいただきたいというのの一つの意見です。

それからもう一つは、今日の資料2で見ますと、もう時期は4月から9月ごろまでということなのでやむを得ないと思うんですけども、私がヒアリングで提案したのは、ぜひ日本には四季があるので、この春夏秋冬というのを意識した内容というの。やっぱり日本の四季というの、我々日本人にとっては大変、いろんな文化活動というのはその四季を背景にできているものが多いわけですし、夏は夏祭りということであると思うんですけども。四季というのを感じさせるというのが、これ世界に対する一つのアピールにも和のアピールにもなるんじゃないかなと思いましたので、それが二つ目です。

それから三つ目は、先ほどのコシノ先生のお話とも全く重なるかもしれませんが、やっぱり日本のお祭りですね、これは私も日本人にとっては大変な財産だと私は思っていて、これ夏祭りに限らないんですけども、四季を通じたお祭りがあるわけ。山・鉾・屋台がこの間、33、一気にユネスコの無形遺産になったのもおわかりのように、日本のやっぱり遺産としてお祭りというのがあると思うので、これを4月から9月ですと限定はされちゃいますので、開催時期以外でもぜひ、いろいろと御相談しながらやっていただくというのが私いいんじゃないかなと。

そして、このお祭りに関連していくと、さらに盆踊りとか民謡とか、それから、最近あまり言いませんけれども、日本の歌謡曲、いわゆるポピュラーソングですね。これも日本にとっては明治以降の大変な私は文化遺産だと思っています、それは最後はカラオケまでいっちゃうかもしれませんけども。こういう日本の踊りとか歌ですね。こういうものをぜひ、先ほどの落語はもちろんですけども、この2020フェスティバルの中にうまく取り入れていただければいいんじゃないかなと。それは国際性も持つことになるんじゃないかなという感じもしました。

○青柳委員長

ありがとうございます。最初のbeyondとの辺り、よろしく願います。

○中村CF0

銭谷委員、ありがとうございます。

まず、聖火リレーとの連携につきましては、これはぜひやっていきたいと思っております。開催地だけでなく全国で盛り上がる非常に大きなイベントですので、連携をとってかなくては絶対いけないと思っておりますので、早い時期から地元の自治体と連携を深めていきたいと思っております。

あと、第1点目のbeyondとの関係でございますけど、これ二つの方向があるかと思っております。一つは、資料3-1で、夏祭りに向けた取り組みということで10ページに応援プログラムという紙を設けさせていただきましたけれども、説明のときにちょっと端折ってしまいましたが、やはり、スポンサーとの関係というのは、このオリンピック・パラリンピックのマークを使うときにどうしてもクリアしなければいけないハードルでございます。一方でオリンピック・パラリンピックに向けた盛り上がりがどんどん高まっていくというのは、これはスポンサーも当然、同じ思いですし、多くのステークホルダーも、また、都民の方々、全国の方々、全て一緒だということでございまして、この夏祭りにつきましては、特にスポンサーの方々の了解を得た上で若干ガイドラインを緩めたりしております。屋台とかでの扱いに加えて、普通ですと、主催者と後援のところには非スポンサーの企業があるとなかなか難しいというところがルール等ございましたが、この夏祭りのときには、明示的にでございますけれども、後援企業が非スポンサーであっても構わないと。ただ、マークがつくポスターにはスポンサー企業の名前だけを出してくださいと。別のそのマークがつかないポスターをもう一つつくっていただく分には、それはどっちでも構わないですよという形です。この応援プログラムのマークも、ぜひ多くの方々に使っていただいて、機運醸成をしたいという方向で今考えております。

その方向が一つと、あともう一つは、やはり最後、どのマークを使うかというところがどうしても超えられない壁が出てくる場合もございまして、それにつきましては、東京フェスティバルの、資料2の10ページでございまして、広報・PRのところでも述べさせていただきましたが、やはり、特に2020年の大会直前に海外から来る方々にとりまして、どのマークが

ついているかどうかというのは本質的な問題ではある意味なくて、できるだけ日本の文化・伝統について、素晴らしいイベントが一つでも多くあればいいと考えておりますので、最後の最後は、やはり2020のフェスティバルだけではなく、この時期に日本の東京あるいは日本の国内、いろんなところで開催される質の高い文化・伝統のプログラムが一覧できるようなそういうパンフレットをきちんとみんなでつくっていけるように、それがあまり重複がないような形で東京都や国とぜひ連携をとっていきたいと考えております。ありがとうございました。

○山崎委員

beyondのマークなんですけど、やっぱり、ちょっとオリンピックとつながらない感じはすごくあるんですね。せっかくbeyondいろんなところにつけてもらって、先ほど松下委員のところにもbeyondはついているんですけど、これがぱっと見オリンピックとどうしてもつながらないので。今から難しいのかもしれないんですけど、これにちょっと市松模様の一部を使うとか、何かそれが少し下に入っていると何かオリンピックに関わるものなんだよ、ということを伝えるようなものをしていかなとなかなか。beyondがいっぱい、やっぱりスポンサーがつけられるということでbeyondはすごく使いやすいと思うんですけど、それがたくさん出てきても、これがオリンピックに関わるものなのかどうかというのはすごくわかりづらいような気がするんです。だから、もちろんまんまのマークは使えないと思うんですけど、少しマークの一部的なというか、一松の感じが少し入っているとやっぱりオリンピックとつながるものなんだなということがすごくわかりやすくなるような気がするんです。

ぜひ、フェスティバル用のマークに関しては、ぱっと見オリンピックの一部なんだよということがわかるようにこの市松模様を何らかの形で使っていただきたいな、というような気がするんですけど。せっかくいろんな方たちがそのマークを使ってやっていくときに、これがオリンピックの一部なんだということは、できるだけいろんな人たちに伝わるといいなという気がしますので、ぜひその辺をお願いしたいなと思います。

○中村CFO

ありがとうございます。

beyondのマークとエンブレムを一緒にしてしまうとやっぱり、一緒というか一部をほうふつさせるようなものというのは、マーケティング上どこまでできるかというのは、内閣官房と相談をさせていただきたいと思いますけれども。できるだけbeyond2020も我々のマークも、2020年以降に向けて何か文化・伝統を盛り上げていこうということでございますので、なるべく同一のイベントに使えるものは二つ使っていただいて、両者同じイメージを持っていれば特定のイベントでたまたまbeyond2020しか出てなくても、ああ、あれはオリンピックとパラリンピックに関係するんだなというようなイメージができるようなことは最低限ぜひやっていきたいと思っています。デザインをどうするかは検討させていただきます。すみません。

○秋元委員

秋元です。フェスティバルの体制について、ちょっと話しできればと思います。冒頭から各委員から内容については非常に、もう既に、いろんな具体的な案がお話をされています。こういったものをいい形で、うまく取りまとめてスタートさせていくためにも、先ほどから出ているプロデューサーというものの必要性というのがあるだろうと思います。

時期を早くしていくということ、プロデューサーを早く決めていく、体制をつくっていくということが一つ。

もう一つ、できれば今も出ていますけども、委員会がつくるプログラムを、また国、東京都それら全体を、うまくまとめていけるのであれば一番いいですし、一人のプロデューサーが統括していけるような体制ができれば、よりメッセージ性は強くなっていくんだろうと思っています。

もう一つが、扱っていくカテゴリーというかジャンルについてです。これもまた芸術・文化の幅は大変広くあるわけでありまして、先ほど銭谷委員から、カラオケという話まで出てきましたけれども、こういった幅広いカテゴリーをきっちり押さえていくということがもちろん重要ですし、その中で、新しい組み合わせというか、それぞれの深みを追求するというのと同時に、新しい組み合わせを使って、何か日本ならではの、または、新しい何か文化発信みたいなものができていけば、より楽しいものになっていくんじゃないかと思っています。

○池坊委員

先ほど、コラボレーションというお話が出ましたけれども、私、狂言とオペラのコラボレーションの中で、生け花に関わったことがあるんです。コラボレーションというのは、やはり、一般の方から見ると、とても敷居が低くなって参加しやすい、興味を持っていただきやすいツールだと思います。それぞれの分野においても、本来、従来だったらこういうふうにしていただけたけれども、そうじゃなくて、こういう考え方もできるんだとか、こういうやり方もあるんだというふうに、それぞれ所属する分野にとっても新しい進化につながる、刺激になることですので、ぜひ、伝統芸能の中のコラボレーションなのか、あるいは最先端の技術とのコラボレーションなのか、いろんな組み方が考えられると思うんですけども、そういうことは非常に有効ではないかと感じております。

それから、ぜひ、文化というのは、みんなが共有できるものであると同時に、やはり、オリンピックというのは、人間がここまでできるんだ。人間が本当に自分、もちろん、持って生まれた身体能力もありますけれども、ここまで努力して、こういうふうにしたら、ここまで行けるんだという、やはり鍛え抜かれた姿勢であるとか、生き方であるとか、数字ではかれない人の生きざまを見せる、感じる場でもあると思います。

それは、恐らくスポーツだけではなくて、日本の伝統芸能であるとか、伝統文化であるとか、伝統工芸でもそういう何か一つの道を究めていくすごさというのは関係性があると思いますので、ぜひ、うまくそういう捉え方というのをいろんな場で活用して、いろんなフェスティバルでも活用できたらと思っています。

それから、先ほどの法被とうちわですけれども、これから夏祭りのシーズンということで、とってもいいと思うんですが、ぜひ、外国からの観光の方が見て、買えるような、あ、これは日本の東京でオリンピックがあって、おしゃれだね、買って帰りたいねと思えるような、ぜひ、そういう販売もしていただきたいと思います。

法被もお祭りのときはいいんですけれども、お祭り以外ではなかなか着にくいところもありますので。普段、もう少し気楽に。オリンピックだから着るといふものもありますが、おしゃれだから着たい、いつも着ているんだというような、何か普通の生活でも着やすいような、何か提案みたいなものはあるのでしょうかということと。

それから、やはり、東京とそれ以外のオリンピックに対する関心度というのは、かなり温度差があるように思います。大方の方にとっては、オリンピックというのテレビで見るといふ、そういう認識がほとんどではないでしょうか。やっぱり、オリンピックによって日本はどう関わっていくのか、自分たちはどういうふうに関われるのか、自分たちがやったことがこういう形になるんだという、もう少し具体的に、可視化できる提示というのが、それを速やかにするというのも必要ではないかと感じました。以上です。

○真田委員

教育の立場からですけれども、いよいよ、あと3年になりまして、外国の教育関係者などの方から、日本でどういう、オリンピックの、パラリンピックの教育プログラムが行われているかという、そういう問い合わせが非常に増えてまいりました。一部、できれば外国でも日本でやっている教育プログラムを取り入れたいと、実施してみたいというような声も来ておりますので。例えば、「よい、ドン！」のプログラムとして、こういうものが日本でやっているオリンピック教育、パラリンピック教育の内容なんだという、ちょっとしたものでいいと思いますので、ネットで体験できるような、そういうものをそろそろ考えていく時期ではないかと、こんなふうに考えております。

あわせて、文化プログラムについても、例えば東京2020フェスティバルについては、外国のさまざまなアーティストを紹介をして、そして呼びかけるような、そのような英語でのサイトも必要でないかなと感じましたので、ぜひ、御検討をお願いしたいと思います。

○吉本委員

秋元さんが体制の話がされましたので、私もそれについて発言をさせていただきます。フェスティバルがうまくいくかどうかは、やっぱり体制がすごく重要だと思います。そして、プロデューサーの話は先ほど来、出ていますけれども、その方に何をお願いするのかということ、明確にしなければいけないと思います。

ロンドンの例でいいますと、フェスティバルと、フェスティバル以外の文化オリンピックの最大の違いは、フェスティバルはキュレーションされているという言われ方をしています。つまり、一つ一つの内容に関して、フェスティバルに位置づけられた事業は、ルース・マッケンジーさんが国際的な発信性ですとか、話題性ですとか、芸術的なクオリティに対して、これはフェスティバルで大丈夫だという、ある種のお墨つきを与えて、それがフェスティバルのプログラムになっています。

ですから、プロデューサーというよりは、ひょっとしたらプログラムディレクターのような役割なのかなという気が私はしています。

それで、先ほど今中委員から御質問いただいた、パラリンピックとの関係でいいますと、アンリミテッドというのが障がい者のフェスティバルだったわけですが、そのアンリミテッドの中にもシニア・プロデューサーという立場の方がいました。ジョー・ヴェレントという方で、御自身が障がいのある方なんですけれども、それから、パラリンピックの開会式を演出されたジェニー・シーレイさんという、この方も障がいのある方なんですけど、その方もシニア・アドバイザーとして入っておられるんですね。

ですから、そのプロデューサー、あるいはプログラムディレクターのもとにいろんな事業が張りついていくと思うんですが、それにはそれぞれまた、プロデューサーであり、あるいはこちらの委員から提案があったものについては、それぞれの委員の方がディレクターなりプロデューサーなりをされると、何かそういう構造になっていくと思います。

それと、もう一つ重要なのは全国展開ということにして、地方都市ではまだ盛り上がり少ないということなんですけれども、ロンドン大会の場合は、全国を12の地域に分けて、それぞれの地域にクリエイティブ・プログラマーという専門家が配属されました。これはアーツ・カウンシル・イングランドという、日本で言えば、文化庁に相当するところの各地の事務所が受け皿になりました。

具体的にどういう機能をしたかといいますと、例えば、スコットランドのクリエイティブ・プログラマーに私、お目にかかったんですけど、スコットランドはロンドンからとにかく遠いので、オリンピックなんて自分たちに全く関係ないという空気が蔓延していたそうです。でも、文化プログラムはスコットランドでも実施できるということ、その方が地域の芸術団体だったり、文化施設に一生懸命に説明し、ミーティングを山のようにやっただとおっしゃっていました。それで具体的な企画が出てきて、そのクリエイティブ・プログラマーが、ルース・マッケンジーさんと相談して、今こういうプログラムが地域から出てきているんだけど、どうだろう。そうしたらルースさんが、それはいいじゃない。フェスティバルでやろうよということで、ルースさんもそれを様々な形で支援して、スコットランドにおけるフェスティバルのオープニングの事業になったりということがあります。そうした全国展開をどうするかということもあわせて、この体制づくりの中で、ぜひ、考えていく必要があるかなと思います。

そして、ロンドンの関係者、ルースさんをはじめ、成功の最大の理由というのは、組織委員会と、ロンドン市と、アーツ・カウンシル・イングランド、日本で言えば、組織委員会と東京都と文化庁ですけれども、その三者が本当に一体となってフェスティバルを運営したことだとおっしゃっています。

たしか、フェスティバルチームというのが最後に組織されまして、40人か50人ぐらいの人たちがいるんです

けども、その中には例えば、ロンドンの文化部長、あるいは、先ほど御紹介した各地のクリエイティブ・プログラマー、それから各分野の専門家など、それぞれ立場は違うんだけど、フェスティバル実現のために集まって、一丸となって尽力されたということ伺っています。

今日の資料にも、アドバイザリーボードの設置とありますが、何かチームで推進してくるような体制をつくれたいのではないかなと思います。

それと、今後、検討されていくと思うんですけども、ロンドン大会のフェスティバルでは、ワンス・イン・ア・ライフタイム(Once in a Lifetime)というスローガンが掲げられました。一生に一度きり、という意味なんですけれども、それはいろんなコンセプトの中から浮かび上がってきたキーワードのようなもので、世界中から来る人たちに一生に一度きりの文化的な体験をしていただくということと、オリンピックでもなければできないような作品、あるいは文化的なイベントを実現しよう、という意味も込められていました。まさしく、ロンドン五輪では一生に一度きりのものを提供しようというスローガンができてきたことで、いろんな意味でフェスティバルが集約されてきた伺っていますので。その辺りのことも、これから検討が必要かなと思いました。

○カミングス委員

こんにちは。昨日、志賀高原に行って、東京オリンピックの看板が貼ってあったんです。やっぱり、オリンピックのこれからの待ち遠しい、あと3年間の間に、参加したいけど参加できるチャンスがないように思っている人が多いけど、逆に考えると、参加したい積極的な人は多いので、その人たちの気持ちを大事にするために。今回、手に触ると、あ、本当に来るんだなということが、わくわくするものがあるんですが。

このロゴを見ると、もう考えているかもしれないんですが、折り紙のセットができればすてきだろうなという。あと、例えば、リースみたいにみんな壁に、扉にかけたくなるような、みんな応援していますみたいなシンボリックなものできたりとか、あるいは、折ってあげて誰かに差し上げられたりとか。ささいなことから参加できるような仕組みができれば。

あと、やっぱり、今、和裁ができる人がすごく少なくなっている。せっかく、オリンピックの着物をつくれるとなると、この法被は日本製かどうか、まだ確認していないんですが。じゃない可能性はあるんじゃないかなと思うと、やっぱり、こういうのも世界の中の日本かもしれないんですが、日本の伝統産業に実際に反映できる何かがあるといいのにな。

あと、私は、和裁の技術がなかなか大したもの、呉服屋さんで働いていた人がもう仕事がなかったりとか、弟子がいないし、どんどんなくなってしまふものではあるかもしれないけど、何となく「ワッサイ、ワッサイ、ワッサイ、ワッサイ」みたいな、何かお祭りに向けて、みんな一生懸命に縫っているような。やっぱり、手をかけただけ心が入るものがあるので、そういう音頭ができればいいかなと思います

○青柳委員長 ありがとうございます。

○森会長 千人羽織だね。

○青柳委員長 ですね。じゃあ、杉野さん。その次に。

○杉野委員

今、全校展開とか、あと応援マークの件が話題になっていましたので、情報提供させていただきたいと思います。

先週、全国の特別支援学校長会の大会がございまして、そのときに、ものすごい人数が全国から集まって、東京のほうでいろいろ教育の話もしたわけなんです。そのときに、この組織のネットワークはすごいぞということを私、本当に改めて感じました。

全国に約1,000校以上、特別支援学校があるんですが、その学校は、恐らく地域の障がい教育とか、障がい者の団体のこと等は全部把握しているわけなんです。それで、障がい者の場合、非常に障がいの多様化と、それから地域団体のいろんな活動。私などは恐らく知らないような活動もたくさんさっていますから。そのネットワーク、いわゆる特別支援学校長会のネットワークを、ぜひ活用してくれないかというような願いも会長のほうから伺いました。

これから体制づくりとか、いわゆる東京オンリーじゃなくて地域のほうにいろいろ、パラリンピックとかオリンピックを広げていくという意味合いでは、非常に有効活用ができるんじゃないかなという気はしております。

それと、応援マーク、私も実は、ちょっと大学のほうに勤務している関係で、学生が子ども体験塾と称しまして、町田市に大学があるんですが、そちらの3歳児から小学生レベルの子どもたち、親子で、それぞれのブースを設けて、7月22日にやるんです。それで、私は実は、障がい関係をずっとやっていたもので、ポッチャをやったら、かなり障がいの重いお子さん方が競技、パラリンピック種目でもあるんですが、それを体験でやらせてみようかなと。学生も、ポッチャって最初言ったときは、え、何のことでしょうかみたいな感じだったんですが。いろいろ、You Tubeなんかにもアップされていますし、いろんな教材にも紹介されているわけなんです。

それで、そういう種目もあるんだよ、ということから始まって、学生主体にそういう活動を行うと。そこで、こちらの組織委員会のほうの「ようい、ドン！」の応援マークを申請させていただきました。あと、地元の東京都教育委員会の後援もいただきましたので、ちょっとはずみがつきまして、大学のほうでも、よし、頑張ってみようかなというふうな雰囲気、出ております。

私が何を言いたいのかといいますと、やはり、ここで大きな方針とかをもちろん検討されておるんですが、その地元で、それぞれの立場でどういうふうな活動ができるのかな、というのを改めて振り返って考えてみたわけなんです。

実は土曜日に、休みの日だったんですが、私が住んでいます地域の図書館の3階で、高齢者とか子ども向けの、

いわゆるユニバーサルのスポーツとでも言うんでしょうか、その中でボッチャを実はやっているというのが市の広報でありましたもので、よし、これ、じゃあ、私も出てみようかなと思ひまして行きましたところ、親子連れとか、あと、本当に御高齢の方なんです。私よりかなり人生の先輩の方々が、ボッチャを喜んで、2時間ぐらいやるわけですよね。そのときの紹介の冒頭に、この種目というのは東京パラリンピックの種目でもあるんですよというのが、地域の社会教育の福祉指導員の方もおっしゃっていました。

ですから、そういうのが、やはり積み重なっていくというようなことも非常に大切じゃないかな、という思いがありましたもので、ちょっと紹介させていただきました。以上です。

○篠田委員

先ほどから参画プログラムの件で、北海道という名前も、今回はどこにも出てこないのがちょっと寂しいなと思ひながら。多分、これから広がっていくのかなと思ひていますが。

先ほど、お祭りを軸にというようなお話があって、非常に賛成だと思ひますけれども、そこにもう一つ、前にも私、考えていたんですけど、やはり運動会という、各学校にあるプログラムの中にこの文化プログラムのものが入っていくと、子どもたちに非常に意識づけがなされていくんじゃないかなということがあります。

ぜひ、キャラクターですか、各学校で応募してもらうときにも、学校の運動会や何かにも、参加できるようなことを意識づけて、参画できていくような形になればいいなと思ひています。

これから考えていくのかもしれないんですけど、その中に音楽的、みんなでダンスができるような一つの音頭的なものがあれば、多分、各学校の運動会の際にそういうものがかけられて、ダンスと一生に、運動会ででも繰り広げられるんじゃないかなと思ひています。

それと、一つ、法被や何かの話も出たんですけど、お祭りは豆絞り、手ぬぐいや何かはよく使われます。運動会でも子どもたちはダンスするときに、北海道だとよさこいソーランみたいなのを必ず各学校で踊っているんですね。ああいうようなことがあれば、手ぬぐいや何かがあると、いろんなことで活用できるんじゃないかなと思ひます。またそういう、一つ、手ぬぐいがあると気楽に、法被は買えないけど、手ぬぐいは頭に巻いたり、汗をかいたりするときにも使って、広まっていくんじゃないかなというふうに考えました。以上です。

○桂委員

先ほど池坊さんもおっしゃいましたですけども、コラボをやるということも、いろいろな芸を見ていただくのは大事だと思います。文化プログラムというのは、オリンピックにとって記録も大事ですけど、人間ドラマというのも大事だと思うんです。それを表現できるのは、芸能のコラボであり、また落語だと思ひます。

一体それ、我々の提案は、どこで、どういうふうに決められるのか。それを早く決めていただかないと。例えば落語についても、募集するのに、みんな考えいただくのに1年ぐらいかかるだろうし、それを選考するのに半年ぐらいかかるし。落語家がそれを覚えるのにもやっぱり半年ぐらい。あんまり、みんなそんなに頭がよくないので、一生懸命覚えなさいといけませんので。それを練り上げるという作業もいりますので。

どなたが、どこで、どう決められるのか。決めるなら早くしていただきたいなということなんです。

○青柳委員長

わかりました。今いろいろ御意見いただいた中で、組織委員会と、それから政府と、それから東京都ということがしばしば問題になったので、この辺で、東京都と、それから、今日は文化庁の方もいらっしゃるようですから、そちらからの今の準備状況等をお話いただけますでしょうか。まず、東京都の桃原さんからお願いします。

○桃原臨時委員

東京都生活文化局次長、桃原でございます。

まず、今の準備状況等について具体的に申し上げます前に、本日、1枚、紙をお配りさせていただいております、番号等、入っていないで大変恐縮でございます。ホストシティ Tokyo プロジェクトという縦長の、ちょっと字が細かくて恐縮でございます。

今回、この文化のプログラムも含めまして、開催都市である東京が、この2020年に東京が持っているいろんな魅力を一体的に発信しようということで、全庁的に組織を立ち上げました。大会の気運醸成であるとか魅力の発信（観光・文化）、それ以外にも復興とか防災であるとか、環境とか先端技術、これらを一体的に発信するというので、担当副知事をトップとする組織を立ち上げたということでございますが。

これは、これまで都庁の中でもさまざまな部局が、それぞれいろんなアイデアを持って、準備等を進めていたんですけども、まさしく先ほど来お話がございましたとおり、大会まであと3年ということでございますので、これをしっかりと外に見えるような形で示していかなきゃならないということで、知事のほうから指示がございまして、これは一例というか、①とか②とか、例えば、この④で文化プログラムの拡充・推進という非常に抽象的な表現になってございますけど、ここを切り口といたして、これから具体的なものを全庁的にも持ち寄りまして、これをどういうふうに打ち出していくかということを急ぎ、東京都としても取り組みを始めたところでございます。

その中で文化プログラムということでございますけれども、私どもも既に、実は2016年の大会に立候補する前段階から、さまざまな文化の取り組みを始めておりまして、既に幾つかプロジェクトが進んでおりまして、先ほど御紹介いただきましたキッズ伝統芸能もその一例でございますけれども。そのほかにも、いろんな補助金を出すような事業であるとか、これから公募しているいろんなプログラムをつくるというようなこともこれから進めていこうかと思ひておりますけれども、一つは、組織委員会さんのほうで御用意なさるプログラムのほうに御一緒させていただけるようなものを、まず核として

しっかりとつくっていききたいというふうを考えております。

ただ、先ほど来いろんな方からも御意見、御質問あったとおり、スポンサーの企業さんとの関係で、どうしてもその中に入りきらないというようなものが、今後どうしても出てくる可能性がある。いろんなプログラムを幅広くやって、しかも東京都だけの立場で申し上げても、東京全体として展開をするということを考えますと、そのプログラムだけというわけにはいかないの、それを取り囲むような形で、東京都としてもしっかり発信の拠点、少なくとも文化の拠点を作りまして、それで進めていきたいというふうを考えております。本日、いろいろ出された御意見なども、できる限りたくさん取り込みながら進めていきたいと考えているところでございます。

また、復興も含めまして全国、全体としてこのプログラムを盛り上げていかなきゃいけないということで、吉本さんのほうからも御指摘いただいたように、しっかり情報を共有して、全国が一体として進めていけるような、そういったチームのようなものを組織委員会の皆さん、あるいは文化庁、内閣官房の皆さんとしっかり御相談させていただきたいと思っております。

また、どんなプログラムをということですが、今、私どもとしても、そういったものをいかに皆さんと御一緒できるかということで、事務的に言うと募集要項のようなものを今、考えているところでございますので、この委員会の中でも、決まり次第、御提供させていただきたいと考えているところでございます。以上でございます。

○青柳委員長

ありがとうございます。内閣府の多田さん、お願いできますか。

○多田臨時委員

先ほどから何人かよりお話がございました、beyondでございますけれども、組織委員会が取り組んでいる参画プログラムのスポンサーシップの課題をどうやって補完するかということで、1月からプログラムの認証が始まりました。オリンピック・パラリンピック直接ではないので、補完という距離感の中で気運醸成に役立てればと思っております。現時点で450弱ぐらいまで登録が進んできているという中で、まさに2020に向けて具体的に今回、フェスティバルのお話が出てきて、ここについては組織委員会が中心になられて、今、桃原さんからもお話があったような課題を、どう調整しながら進めていけるかということ、これから四者で協議をしながら検討していく局面になってきているかなと思っております。

beyondも含め、それから、委員長にも大変お世話になっているオリパラ基本方針推進調査の試行プロジェクトは、毎年二、三十、応援させていただいておりますけれども、そういったことも含めて、上手に気運醸成を進めていきたいと思っております。

○青柳委員長

それから、文化庁の方、さっきの資料に基づいて、ちょっと御説明願えますでしょうか。

○永山臨時委員

お手元に先ほど来、銭谷委員のほうから御紹介がありましたが、文化庁のプログラム、パンフレットをお配りさせていただいております。「文化プログラム発信！」ということで、見開きのものでございますが。

この5月から文化庁のほうで、文化情報プラットフォームというものをスタートさせました。これは、今後さまざまな地域で、また、盛んに実施される文化プログラムについて、さまざまな情報を一元的に発信をする、そういうプラットフォームとして文化庁が策定したものでございます。

この中で、一番後ろになりますけれども、文化庁自体がbeyond2020の認証の機関としてお認めいただいておりますので、ここではそういう情報を一元的に発信する、また、多言語で、海外の方も御覧いただけるような形で発信することとともに、このプラットフォーム上でbeyondの認証もできるような仕組みというものを整えまして、今後のbeyond、2020に向けての気運醸成に努めていきたいというふうを考えております。

また、文化庁の役割ということで申し上げますと、先ほど東京国立博物館の話もありましたが、それぞれの美術館、博物館で、当然、2020というのは大きなターゲットでございますので、それに向けての企画というものを順次進めているということとともに、この文化情報プラットフォームも2020年、それ以降もレガシーという話もありましたが、レガシーとして残っていくものだと思っております。そういう2020に向けてというそれぞれの取り組みと、2020以降も見据えた取り組みと、両方踏まえた取り組みというものを今後、進めていきたいと考えております。

○青柳委員長

どうもありがとうございます。

○絹谷委員

先ほど言いましたように、日本の文化の中には、例えば宝塚。宝塚では女性が男性の姿をして演技と。歌舞伎。歌舞伎は、男性が女性の格好をして演じています。こういう相反する世界を日本はこういうふう、相反する概念を、男女という概念を乗り越えているというようなところも、こういうフェスティバルで何か提示していく。これは新しい方向だと思っております。今いろいろ問題になっておりますが、それが一つ。

それからもう一つは、東京の中にも、地方と東京という落差もありますけれども、東京の中で非常に、影の部分といえますか、オリンピックの周辺はきれいなだけけれども、どっかそっちの工場地帯のほうは何かおかしい、何かちょっと変だよというところは、貧しい芸術家を育てる意味で、そこに、ハワイにちょっと工場地帯みたいなところを、だあっと家の中にうわっと絵を描いているのがあるんです。そこが非常に今、若い人たちの集まる場所。そこには安い食堂もあります。そういうところを東京の中にも、日本に来られた方は、いろんなところに行っても楽しいというような場所をつくってほしいかなという気がするんですね。

オリンピックをやるところだけがきれいだと、美しいというんじゃなくて、東京の中にも、大変、楽しい、インテリジェンスがあるというところを芸術家を使って証明してってもらえればいいかなというふうに思います。以上です。

○青柳委員長

ありがとうございます。今、盛りだくさんのお話をいただきました。我々、やっぱり、日本の文化の特徴が何かということ。つまり、例えば、災害が起きてても非常にたくましく、しなやかに復興できるという、いわゆるレジリエントなところがある。それから、大変にクリーンで、そしてセーフティであるというようなところ。それから、工芸品にも見られるよな、大変クオリティが高いということ。それから、伝統芸能、あるいは伝統工芸のように、もう何百年も、あるいは千年以上も継続しているという世界にまれのない継続性を持っているというような、そういうコンセプトと同時、場と時というものをどう組み合わせるのかということが、これから非常に重要になっていくのではないかと思います。

そういうことを今、いらっしやったいろんな方々の意見を事務局のほうとも考えながら、構築的に、立体的にこのフェスティバルや、あるいは文化プログラムを構成していきたいと思います。

そういうことで、今日の皆様の意見をいただいた上で、森会長から一言よろしく願いますでしょうか。

○森会長

長時間ありがとうございました。

前々回この会があった後に一部メンバーの方から、大分お叱りをいただきました。何の議論をしとんのやと。具体的なことは何も決めんやないかと、こういうお話。今、ちょっと、文枝さんのまねをしたわけじゃない、文枝さんが言ったわけじゃないので。ちょっと関西弁で言うとそういうことやった。それで、フェスティバルの話に絞ったわけですね。

フェスティバルをどういうものにしましょうかというので今日の議題ですが、やっぱり、文化論も随分あるわけですね。これはなかなか決まらない。

中村さん、今日はものすごくいい意見、たくさんあった。すぐやるものと、少し考えることと、長期的といたってあと3年ですからね、ちゃんと仕分けをしてやらないと、さっき文枝さん言われたように、落語をつくって仕込みまでに、これだけかかるよということ。現に今あなたが来ているその法被、カミングスさん、いいこと言った。これ、たしかメイド・イン・チャイナですよ。なぜそうなったかと。議論ばかりしているうちに日本でつくれなかったんです。何枚だったかな、5万。

○中村CF0

これは5,000です。

○森会長

5,000枚の法被を3カ月でつくれないんです、今、日本は。そんなものつくってくれないですよ。この議論も、夏祭りに何かしようしようなんて言っているうちに、あと夏祭り3回しかないんですよ。今年、無駄にすることないじゃないかということで急にやったんだけど、法被がそれだけかかるでしょう。本当は、みんな浴衣にしたかったんです。これは来年、再来年の楽しみで。そんなことで、議論だけしていると結局、オリンピック終わってから落語がで上がるようなことに。

それから、さっきどなたからか出ていましたけど、私がちょっと前に申し上げた、アテネのときに参加したんだが、全世界からいろんな、ミュージカルとか舞台劇だとか、いろんなものが集まっていたよ。そういうのが日本であるのか、ないのか。これも中村さん、よく考えなきゃいけないことが一つだと思います。

今中先生おっしゃったけれど、関西、ちょっとあれをしているんじゃないかというような印象を受けておられますが、これは東京及び神奈川、千葉、埼玉という、この近県でやっているという、開催地がそういうことです。いろんな意見があって、大阪のあのすばらしいあそこでサッカーをやってくれとか、名古屋の、地元でやってくれとかあるんだけど、やっぱり東京なんで、それ以外になぜ外でやるのかという大義名分がなきゃならん。それが、やっぱり復興なんです。東日本。ですから、ぎりぎりサッカーの場合も、茨城までがその対象地になる。

関西は、これは政府もみんな関係しておりますが、今中さん御存じだと思いますが、2021年にワールドマスターズ、これは関西圏、四国まで入れて約十何県でやるんですね。このことが非常に盛大にやりますし、選手はオリンピックより多いんですね。観客は別としても、参加する選手はオリンピックより多いという大きなイベントです。あまりこれの妨げにならないように、関西の領域にまで入らないようにすることも大事なことだというふうに、そこは井戸知事とも相談をしながらやっております。

そういう意味で、議論倒れだけになっていると大変時間がかかることになりますので、ぜひ委員長のほうで、中村君しっかりアドバイスをして、お手伝いをして、ちゃんとまとめて、また次のとき終わったら、何してんやとまた電話がかかってくると困るので。どうぞ具体的に、やるべきものと、来年やるものと、いよいよオリンピック前年にやるものと、きちっと分けて、整理したほうがいいかなというふうに思っています。

今日は本当に長時間、たくさんいい御意見をいただきまして、私から御礼を申し上げますが、事務総長からもちょっと。

○青柳委員長

ありがとうございます。武藤事務総長、お願いします。

○武藤事務総長

いろいろありがとうございました。

それで、文化活動等に対するアイデアといいますか、中身については本当にいろいろな御意見をいただきましたので、それをもとに我々も対応していきたいと思います。

今日申し上げたいことは、体制の整備が重要ということが、吉本委員からございましたし、文枝さんからは、いつまでに、誰が決めるんだというお話がありました。

ポイントは、これの実施体制を早くつくることだと思っています。ルース・マッケンジーさん、この間、来まして、私も1時間ばかり意見交換をしました。大変すばらしい女性なんですね。こういうことに関するプロフェッショナル。全員がそのルース・マッケンジーさんに一目も二目も置いているものですから、いろんな順番を決めたり、どこで、何をやるかというのは、彼女が一生懸命説得すると大体まとまってきて、ロンドンでは大成功だと。この文化プログラムの大成功の主な要因は、このルース・マッケンジーさんが仕切ったからだと言われているわけなんです。

日本にそういう人がいるかどうか、私もまだわかりませんが、日本は日本的に何人かで、集団指導体制ということもあり得るかもしれませんが、いずれにいたしましても、そういう体制、これは、プロデューサーという人を決めるのかどうかということは、まだ決まっていないうですけれども、事務局のほうで早急に、会長とも相談しながら決定していきたいと思います。それを皆様にお知らせすることによって、もし御意見があればお聞かせいただければと思います。

実施体制についてはそんなふう考えておりますので、よろしく願いいたします。

それから第2番目は、オリンピック、東京だけど温度差があつて、地方のほうでまだそれほどでもないという、これは何人からも、今中さんから御指摘ありました。全都道府県の代表者を集めたらどうかということも、一つのアイデアだと思います。

我々、全国展開、先ほど、スコットランドで大変盛り上がったという話もありましたが、ぜひ、北海道でも盛り上がっていただきたいし、沖縄でも盛り上がっていただきたい。そういうことなので、参画プログラムの活性化をどうするかということが、我々にとっては大きな問題だと思っています。

組織委員会、それから東京都、文化庁、内閣府も含めまして、連携を密にしながら、今の、特に二つの点については具体的にやっていきたいと思います。今日の皆さんの御意見、大変参考になりましたので、それをもとに進めさせていただきます。ありがとうございます。

○森会長

ありがとうございました。

○青柳委員長

最後に、事務のほうから連絡をお願いいたします。

○中安部長

お配りしております資料と、本日フルオープンでございましたけれども、議事録につきましては、後日、組織委員会のホームページで公開をさせていただきたいと考えております。

また、次回の開催については、別途、御連絡をさせていただきます。

さらに、今日、I'm POSSIBLEの教材見本を机の上に置いてございますが、こちらについて、教材本体を別途、御用意しております。ちょっと大きいものにもなりますが、御希望の方は郵送等させていただきますので、事務局にお声がけください。

なお、本日は記者の皆様到最后まで傍聴いただきましたので、プレスへのデブリございません。以上でございます。

○青柳委員長

どうもありがとうございました。